平成26年春季全国火災予防運動

３月１日（土）～３月７日（金）

統一標語「消すまでは　心の警報　ＯＮのまま」

３月１日から一週間、平成26年春季全国火災予防運動が実施されます。
火災が発生しやすくなるこの時季、火の用心を心がけ、防火に関する正しい知識と行動力を高めることで、よりいっそう「安全・安心のまちづくり」を進めましょう。

平成25年の高槻市内における火災件数は１１１件で、前年と比べ9件の減少となりました。
全火災を出火原因別に見ると「たばこ」が28件で一番多く、次いで「放火（疑いを含む）」が27件、「こんろ」が10件となっておりますが、火災による死者は当初の目的であるゼロを達成しました。

平成26年春季全国火災予防運動の重点目標
（1）住宅防火対策の推進
（2）放火火災・連続放火火災防止対策の推進
（3）特定防火対象物等における防火安全対策の徹底
（4）製品火災の発生防止に向けた取組の推進
（5）多数の観客等が参加する行事に対する火災予防指導の徹底
（6）林野火災予防対策の推進

住宅防火対策の推進

全国の住宅火災による死者は、毎年1,000人を超えており、そのうち半数以上が逃げ遅れによるものです。火災からの逃げ遅れをなくすため、「住宅用火災警報器」を設置しましょう。

住宅防火を図るため、次のことを心がけてください。
- 住宅用防災機器の設置推進
- 防炎物品及び防炎製品の使用の推進
- 火気使用設備・器具及び電気製品等の点検・整備等の推進
- 住宅防火「いのちを守る　7つのポイント」の励行

住宅防火　いのちを守る　7つのポイント　―3つの習慣、4つの対策―

3つの習慣

①**寝たばこ**は絶対やめる。
②**ストーブ**は、燃えやすいものから離れた位置で使用する。
③**ガスこんろ**などのそばを離れるときは、必ず火を消す。

4つの対策

①逃げ遅れを防ぐために、**住宅用火災警報器**を設置する。
②寝具、衣類及びカーテンからの火災を防ぐために、**防炎品**を使用する。
③火災を小さいうちに消すために、**住宅用消火器等**を設置する。
④お年寄りや身体の不自由な人を守るために、**隣近所の協力体制**をつくる。

防火安全対策の徹底

全ての住宅に住宅用火災警報器の設置が必要です！

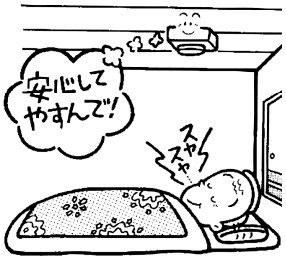
住宅火災による死者数を減少させるため、平成23年6月より全ての住宅（自動火災報知設備等が設置されているものを除く）に住宅用火災警報器（以下「住警器」という）の設置が義務化されました。みなさまのご家庭ではもう住警器を設置されましたか？
住警器は、火災の煙を早期に感知してあなたやあなたの家族の「いのち」を守ります。まだ設置されていないご家庭では早急に設置しましょう。また、すでに住警器を設置されているご家庭でも、いざという時に作動するように日頃からの維持管理をお願いします。

◇ あって良かった！住宅用火災警報器　！◇

・ 居住者が、鍋をコンロにかけて温めている途中に居眠りをしてしまったため、鍋から煙が上がったが、台所に設置していた住警器の警報音で目が覚めて、コンロの火を消したため火災に至らなかった。

・ 居住者が、就寝時に電気ストーブを消し忘れたため、近くの毛布に着火したが、寝室に設置していた住警器の警報音で目が覚めて、水バケツで初期消火し、119番通報した。

寝室に住宅用火災警報器を取り付けましょう！



・ 通行者が住警器の警報音と、付近で煙のにおいがするのに気づき、119番通報した消防隊が建物の中に入ると、居間にあるベッドの布団から煙が立ち上がっているのを発見し、消火したため大事に至らなかった。

◇ 日頃のお手入れと作動確認　Q&A ◇

1 掃除はどうすればいいの？
⇒ 住警器はホコリが入ると誤作動を起こすことがあります。定期的に掃除を行ってください。
掃除の方法は、機種によって異なりますので取扱説明書で確認してください。

2 作動確認はどうすればいいの？
⇒ 住警器は電池が切れると作動しなくなります。定期的にボタンを押すなどして作動確認をしてください。

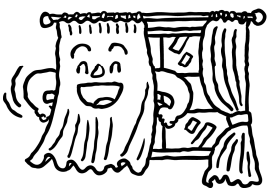
3 火災でないのに警報音が鳴ったときの対処方法は？
⇒ 調理時の湯気や煙、ホコリなどが原因で警報音が鳴る場合があります。この場合、取り付け位置を変更しましょう。また、ピッと短い音が一定の間隔で鳴る場合は、電池切れの音です。電池を交換するか、新しい機器に交換して下さい。

4 燻煙（くんえん）式の殺虫剤を使用しても大丈夫？
⇒ 燻煙式の殺虫剤等を使用する場合、住警器が誤作動を起こすことがあります。住警器を取り外したり、ビニール袋で覆ったりしてください。また、使用後は速やかに元に戻してください。

防炎品の普及促進

近年発生した住宅火災における着火物の状況をみると、寝具類、衣類やカーテン等の占める割合が高くなっています。また、65歳以上の高齢者では、その割合が更に高くなります。今後、本格的な高齢化社会を迎え、着衣着火等による犠牲者の増大が危惧されることから、衣類、寝具類やカーテン等に防炎品を使用することが、住宅火災の発生と死者の低減を図る上で有効な対策と考えられます。
また、放火防止対策として、自動車やオートバイ等のカバーに防炎品を使用することも有効といえます。

防炎品のカーテンを使いましょう。



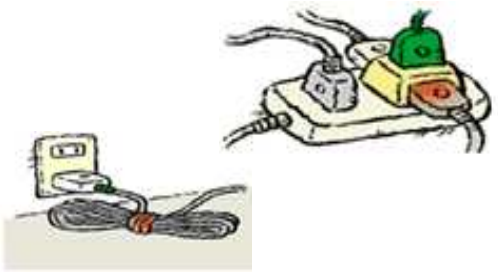
※ 防炎品が役に立った事例
リビングで夕食の準備をしようとカセットこんろにボンベを装着して点火したところ、こんろ脇から漏れていたガスに引火し、炎が噴出し、室内のカーテンの一部を焦がした。
⇒ コンロから50cm離れたところのカーテンが防炎品であったので、一部焦がしただけでケガ人はなかった。

製品火災防止について

電気製品、燃焼機器、自動車といった日常生活において身近な製品が発火源となる火災が発生しています。
長期間ご使用の家電製品は、熱、湿気、ほこりなどの影響により、内部部品が劣化し、発熱、発火のおそれがありますので、使用中に異常な音や振動がしたり、焦げ臭いにおいがするなどの症状が見られる場合には、電源スイッチを切り、コンセントから電源プラグを抜いて、お買い上げの販売店またはメーカーにご相談ください。

※電源コードにご注意ください

◎電気コードが事故につながる可能性がある場合
- ・電気配線工事を素人がおこなっている
- ・コードを継ぎ足してビニールを巻いている
- ・コードを強く曲げている
- ・タコ足配線をしている



※電源プラグにご注意ください

◎使用を中止したほうが良い場合
- ・配線が切れかかっている
- ・電源コードやプラグが異常に熱い
- ・焦げ臭いにおいがする

林野火災予防対策の推進

平成26年山火事予防の標語
『守りたい　森の輝き　防火の心』

冬から春先にかけては山火事が多くなる季節です。日本で発生する山火事の約7割が、12月から4月にかけて集中して発生しています。山の中で火を使うときは、気象状況や周囲に燃えやすい物がないかなどに注意しましょう、また、近くに消火用の水を必ず用意し、火から離れないようにしてください。そして、たばこの投げ捨ては絶対にしないでください。たばこの灰や吸殻は、携帯灰皿に入れて持ち帰りましょう。
山火事は、いったん発生すると消火は容易ではなく、貴重な森林を消失するばかりか、その回復には長い年月と多くの労力を要することとなりますので、山での火の取扱いには十分気をつけましょう。

車両の防火安全対策

1 消火器設置義務車両の消火器の点検整備及び
取扱方法の習熟
2 車両に消火器の設置普及
3 自動車等のボディカバーにおける防炎製品の使用促進
4 車両の内燃機関、電気系統等の点検整備

ガソリン携行缶を安全に取り扱うための留意事項

ガソリンは揮発性が非常に高く、蒸気は空気より重いため、低温環境下においてもガソリン携行缶の蓋を開けると可燃性蒸気が出て、静電気火花のような小さな火源でも火災になる可能性があります。

また、消防研究センターが行った夏季にガソリン携行缶を直射日光の当たる場所に置いた実験等から、携行缶内の液温は約55℃まで上昇するとともに携行缶内圧も上昇し、その状態でガソリン携行缶の蓋等を開放するとガソリン内部に気泡が発生（低沸点成分が沸騰）し、大量の可燃性蒸気が携行缶外に排出されることもわかっております。さらに発電機の排気口近傍にガソリン携行缶を置いた実験等では、携行缶内の液温は約90℃まで上昇し、その状態で蓋等を開放すると激しい突沸現象が起きて、大量のガソリンが開口部から噴き出す危険性が高いこともわかっております。

これらのことを踏まえますと、ガソリン携行缶を安全に取り扱うためには、次の事項に留意する必要があります。

1　ガソリン携行缶は、直射日光の当たる場所や高温の場所に置かないこと

夏季はもちろん、それ以外の時期でも直射日光の当たる場所や高温の場所にガソリン携行缶を置くと、ガソリン液体又は可燃性蒸気が大量に噴き出す可能性があるため、日陰の風通しの良い場所にガソリン携行缶を置くことを徹底する必要があります。

なお、ガソリン携行缶の蓋やエア抜きの締め方が緩いとガソリン携行缶周辺に可燃性蒸気が出続けて危険ですので、使用後は確実に締めることも重要です。

2　ガソリン携行缶を取り扱う場合は、周囲の安全確認とエンジン停止を徹底すること

ガソリン携行缶を取り扱う場合は周囲に火源になりそうなものがないことを確認するとともに、万が一、火災になっても延焼拡大や人的被害が生ずるおそれがないことを確認する必要があります。特にガソリン携行缶を用いて発電機等にガソリンを注油する際には、ガソリン携行缶の蓋を開ける前に発電機等のエンジンを停止することが必要です。

3　ガソリン携行缶の蓋を開ける前に、エア抜きを行うこと

日陰の風通しの良い場所にガソリン携行缶を置いてあっても、外気温の上昇に伴いガソリン携行缶内の圧力が高くなっている可能性があり、ガソリン携行缶の蓋の開放に伴い可燃性蒸気が噴き出す可能性があることから、ガソリン携行缶の蓋を開ける前に、少しずつエア抜きを行うことが望ましいです。また、エア抜きはガソリンをスムーズに注油するための空気取入れ口を確保する意味でも有効ですので、エア抜きのあるガソリン携行缶にあっては注油前に積極的にエア抜きを行うことが重要です。

ただし、直射日光や発電機の排気口等によりガソリン携行缶が暖められている場合は、ガソリン携行缶の蓋の開放のみならずエア抜きも厳禁です。直ちにガソリン携行缶を周囲に火気や人がいない日陰の風通しの良い場所に移動させ、ガソリン温度が常温程度まで下がる6 時間程度はおいた後に、ゆっくりとエア抜きをすることが必要です。なお、ガソリン携行缶内部が高温・高圧になっている場合は、ガソリン携行缶の外側が熱くなっていたり、ガソリン携行缶の蓋が固く開けにくくなっている場合があることにもご留意下さい。